

乳児の頃 遊びの特徴

大人との愛情深い関わりの中で、身近な人との絆が育まれる時期です。
遊びの中で様々な物に触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚を豊かにしていきます。

ねえねえ、遊んで～！



遊んでほしいんだな。Aちゃんの
まねをして声をかけたら楽しいかな。

エピソード

Aちゃんは、「アーアー」と声を出して大好きな大人を呼びます。抱き上げてもらい、「ご機嫌だね～」と優しく声をかけてもらうと、Aちゃんはにこにこしながら声を出したり、手足をばたばたさせたりします。大人がのぞき込んでAちゃんと同じように「アー」と声を掛けると、Aちゃんは喜んで声をあげます。また同じように、のぞき込んで「アー」と声を掛けると、Aちゃんは手をばたばたさせながら声を上げて笑います。そのやり取りは何回も繰り返されました。

大好きな大人との心地よいやり取りを楽しみ、その喜びを体全体で表すAちゃんの姿が見られました。

遊びの中の育ち

- 自分の働きかけを通して、心地よい環境を味わっている。
- 自分の要求に応じてもらえるという喜びを感じ、声などで自分を表現する意欲を高めている。
- 心地よいやり取りを楽しみ、その心地よさを体全体で表す。

育ちを促す大人の役割

- 愛着の対象である特定の大人が視界の範囲内にいる。
- 愛情豊かで受容的・応答的に関わる。
→ 穏やかな声でゆっくりと話しかける。
→ 丁寧に子どもの目を見て温かく関わる。
- 子どもが捉えたものを一緒に受け止め、意味づけをする。

育ちのつながり

この時期の子どもは、主体として受け止められ、その欲求が受容される経験を積み重ねることによって育まれる特定の大人との信頼関係を基盤に、世界を広げ言葉を獲得し始めます。

特定の大人との間に形成した愛着関係をよりどころとして、基本的信頼感、自己肯定感を育てていきます。さらに、自分の気持ちを表現しようとする意欲が生まれます。こうした育ちは、人と関わり合いながら生きていくための力の基盤となります。

1から2歳児の頃 遊びの特徴

少しずつ自分の思いを言葉で発するようになり、自分でしようとする気持ちが芽生える時期です。身の回りに様々な人がいることに気づき、信頼できる大人の仲立ちにより、人との関わり方を身に付けていきます。

出た！出ない・・・



エピソード

Aちゃんは、いろいろなおもちゃが入ったビニールプールの中で遊んでいます。底に穴があいたボトルに水をすくい入れ、底から水がシャワーのように出ると、「出たー！」とうれしそうに声を上げます。大人は「ワーッ、いっぱい出たね。」と言いながら、その水を受け止めるように両手をかざします。

何回もそれを繰り返した後、Aちゃんは穴のあいていないボトルに持ち替えて水をすくいましたが、水は出て来ません。少しげんそうな顔をしながら「出ない・・・。」とつぶやき、元のボトルに持ち換えます。水が出ることを期待していたのでしょう。元のボトルからこぼれ落ちる水を見ては、「出たー。」と言いながら、自分の手や浮いているアヒルのおもちゃに水を掛けて遊び続けます。そして、再び穴のあいていないボトルに持ち替え水をすくいますが、「出ない・・・。」穴のあいたボトルとあいていないボトルとを交互に持ち替えては、「出たー！」「出ない・・・」を繰り返しています。

遊びの中の育ち

- 大人の愛情豊かな受容の下で、安定感をもって生活している。水の冷たさが心地よい感覚であることを楽しむことが感覚の働きを豊かにする。
- 様々なおもちゃを手にするという、自ら環境に働きかけていく姿がある。ボトルにすくった水が底からこぼれ出るという水の動きのおもしろさを堪能している。そしてどの容器でもそれが起こるのかを、起こることを期待しながら試している。
- 現象の違いを言葉で表現している。

育ちを促す大人の役割

- 安全管理の下、受容的・応答的な関わりをする。
- 水の心地よい感覚を楽しめるよう、水の温度や量に留意する。
- ビニールプールやたらいに大きさや形、水の出方が異なる容器や、水に浮かぶもの・浮かばない物等、性質の違いがあるものをいくつか浮かべておく。
- やりたいと思った遊びができるように、いろいろな水遊び用具を、自由に手に取れる場所に用意する。

育ちのつながり

全身運動や手先を動かす遊びが増え、語彙数も多くなります。自我が育ち、けんかや叩く、噛む等の行動も表れますが、大人が子どもの行動の意味に共感し、行動の意味にぴったりの言葉や行動を繰り返し伝える中で、安心感と信頼感を深めていきます。

また、生活の自立が徐々に確立し、周囲の大人や友達と共に過ごすことの喜びを味わうことを通して、様々なことに興味や関心が広がり、多様な活動をするようになります。言葉でのやりとりもできるようになり、伝えることを楽しむようになります。

3歳児の頃 遊びの特徴

何でも自分でやりたい気持ちが育ってくる時期です。遊びながら、「やってみたい!」「やったらできた!」を繰り返すことで、もっとやってみたいという気持ちが育っていきます。大人の手助けのもと、自分の思いをもって「やってみたい!」と遊ぶ時期です。やってみたい!これは、自我が芽生えている姿でもあります。

とんだ!とんだ!

どんぐりさん、
カップに入るといいね。

カップの中に入れていいな。



エピソード

秋、どんぐりを使って、ごちそう作りやアクセサリー作りが始まりました。作った物が増えていくとそれを使って、お店屋さんごっこやお姫様ごっこをする子も。そのうち、どんぐりを投げたり、転がしたりすることに興味をもつ子が増えていきました。そこで、保育者は玉を跳ばすおもちゃを用意し、子どもたちに見せると「やりたい」という声が上がりました。玉置台にどんぐりをセットし、台の先端を指ではじきます。力加減で、どんぐりが遠くに跳ぶこともあるし、近くに落ちることも…。跳び方が1回1回違うことに気付いた子どもたち。Aちゃんは遠くに跳ばしたいと願い、Bちゃんは、カップや箱の中に入れてほしいと願い、何度も繰り返していました。また、Cちゃんはどんぐりではなくスポンジの玉やティッシュペーパーを丸めた物などいろいろな物を跳ばすことに興味をもち、何度も繰り返していました。子どもたちは自分なりの遊び方で繰り返すおもちゃに関わり十分に楽しんでいました。

遊びの中の育ち

- 「遠くに跳ばしたい」「あの箱に入れてほしい」「いろいろな物を跳ばしたい」など自分のやりたいことに向かって諸感覚を働かせ繰り返しおもちゃに関わっている。
【主に健康な心と体】
- 玉を跳ばすおもちゃに興味をもち、その仕組みを感じ取りながら、思い思いのやり方を楽しんでいる。
【主に思考力の芽生え】
- 秋の自然物(木の実)を遊びに取り入れて、自分の思いのままに遊ぶ。【主に自然との関わり・生命尊重】

*青字は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目の中から主なものを示している。

育ちを促す大人の役割

- 身近な秋の自然に触れ、興味をもてるように、どんぐりや落ち葉などを子どもが使いやすいところに置いておく。
- 「すごいね」「もう少しで入りそうだね」などと声をかけ、子どもの何でもやりたくなる気持ちに共感しおもちゃで遊ぶ楽しさを十分に味わわせる。

育ちのつながり

子どもはおもちゃなど身近なものに繰り返し関わる中で、物の性質や仕組みを感じ取ったり気付いたりするようになります。やがて5歳後半になると、遊びや生活の中で、物の性質や仕組みなどを生かして、考えたり予想したり工夫したりするなど身近な環境との多様な関わりを楽しむようになります。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分の考えを見直し新しい考えを生み出す喜びを味わっていきます。このような経験は、小学校以降の学習において、主体的に問題を解決する態度へつながっていきます。

4歳児の頃 遊びの特徴

人との関わりの中で、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しい等の多様な感情体験をしていく時期です。遊びの中で自分の思いを言葉で伝えたり、友達によさや違いがあることに気付いていきます。時には他人と思いを同じくしたり、ぶつかったりしながら、人との関わりを深めていきます。

なんのお寿司をつくろうかな

キュウリがはいっているのっ
て「カッパ巻」て言うんだよ

のいを巻くのが
むずかしいんだ



サーモンはこっちの色
がいいよね。

エピソード

「うどんのうーちゃん」を読んだことをきっかけに A ちゃんが寿司を作り始めました。それに興味をもった子どもたちが「私もつくる」「僕はたまご寿司」と次々に寿司作りが始まりました。緩衝材や画用紙、シール等多様な素材を用意すると、子どもたちは、絵本に載っている寿司や友達が作った寿司を参考にしながら、一人一人がオリジナルの寿司を作り出しました。できあがった寿司を大皿に並べていきます。寿司が増えてくるにつれて子どもたちの顔が輝き出します。自分たちが作った様々な寿司に満足している様子。最後には、「おうちの人に売りたい」という声が聞かれました。

遊びの中の育ち

- いろいろな素材を使って自分たちなりにイメージをもち作っている。【主に豊かな感性と表現】
- 「これマグロ」「すごいね。本物みたい」「わたしもまねする」と子ども同士で会話を楽しんでいる。【主に言葉による伝え合い】
- 作った寿司を活用し、実際にお寿司屋さんに行った経験を再現し、遊びを発展させている。【主に社会生活との関わり】

*青字は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目の中から主なものを示している。

育ちを促す大人の役割

- 子どもの「作ってみたい」「自分も作れそう」という意欲を喚起するため、子どもの扱いやすい素材を用意したり本物の容器を用意したりする。
- 子どもの創意工夫を促すため、シンプルな素材を多様に用意し、子どもが考えて作ることができるようにする。
- 子どもの今の活動が次につながるように、子どもの様子に応じて、少しずつ素材を増やす等の準備をする。
- 子ども同士が互いの活動が見えるように机を配置する。

育ちのつながり

子どもが繰り返し多様な素材や用具に触れ、その子なりのイメージやアイデアが生まれ、表現することが楽しくなっていくと、それぞれの表現を友達と認め合い、取り入れたり新たな表現を考えたりして更なる意欲が喚起されます。こうした経験は、5歳児において共通の目的を見出し協同的に活動する際に、自信をもって自分の意見を述べたり、相手の意見を聞き入れたりすることにつながります。そして、このことは、自らの感性を働かせながら自分の気持ちや考えを適切に表現する方法を選ぶなど小学校以降の学習全般の素地となります。

5歳児の頃 遊びの特徴

仲間と一緒に活動する中で、一人では味わえない充実した活動が展開されていく時期です。共通の願いや目的が生まれ、思いを伝え合ったり、折り合いをつけたり、試行錯誤したりしながら、共通の目的が実現していく達成感や充実感を味わっていきます。

みんなが入れるテントをつくろう

ちゃんと棒をもってるから、
がんばって！



もうちょっとで
棒の先に届くよ。

エピソード

冒険ごっこを楽しんでいた子どもたち。Aちゃんの「テントごっこしたいな」という発言にクラスみんなが賛同し、『みんなが入れるテントを作る』という共通の目的が生まれました。カラービニール袋をつなぎ合わせてテントの天幕を作っていきます。支柱を立てる子、天幕を支柱に留める子、子どもたちの中で自然と役割分担ができ、協力する良さを実感します。「ぼくが手を放すと倒れちゃう」Bちゃんが突然声を上げました。「この棒じゃだめだ」子どもたちは再びポール置き場に集まり、テントの支柱に最適なポールを選びます。今度は支柱台のついているポールを選びました。これでうまくいくと思いきや、支柱は天幕の重みで再び倒れてしまいました。すると子どもたちは、粘着テープで支柱台を床に固定しました。様々な試行錯誤を繰り返し、完成したテント。全員でその中に入ったとき、どの子の顔にも達成感や充実感があふれ出ていました。

遊びの中の育ち

- 共通の目的に実現に向け、考えたことを相手に分かるように伝えながら工夫したり協力したりしている。【主に協同性】
 - テント作りの過程において、失敗も繰り返す中で、友達と力を合わせ難しいことでも諦めずにやり遂げようとしている。【主に自立心】
 - テントの天幕を作る際、長さや広さを考えながらビニール袋をちょうどよい大きさに切って貼り合わせることで、長さや図形への感覚が磨かれている。【主に数量や図形、標識や文字などへの関心感覚】
- *青字は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目の中から主なものを示している。

育ちを促す大人の役割

- テントのイメージがわくように、テントの写真をホワイトボードに掲示したり、キャンプが題材の本を棚に並べておく。
- 材料や道具は数種類用意し、子どもが自分のやりたいことに合わせて選べるようにしておく。
- 作業を進める中で、意見が対立したり、うまくいかなかったりしても、個々の思いに共感を示しつつ、まずは見守り、子どもたちで解決できるように支援する。

育ちのつながり

このような経験を通して育まれた協同性は、小学校における集団での活動の中で、生かされていきます。共通の目的に向かって自分の思いを言ったり、友達の意見を聞いたり、意見を交わす中で、新しい考えを生み出しながら工夫して取り組んでいきます。友達と協力して生活したり学び合ったりする良さや楽しさを感じながら、人との関わりを深めていきます。